

皇  
女子立志編  
上野  
理一編纂  
卷三

福岡第一師範學校  
學校圖書)

登錄號	第	號
神學部		門
倫理學		部
卷欲訓	婦女訓	項
目		次
冊ノ内第		冊
分類號	第	號
154.6		

159.6  
U 45  
(3)

皇朝女子立志篇卷之三

目次

- 第一 清水左衛門尉の母勇力あつて且讀書を好  
みし事<sup>二丁</sup>
- 第二 顯如上人の母金言の事<sup>二丁</sup>
- 第三 毛利元次の女某伶俐活潑ありし事<sup>三丁</sup>
- 第四 也須女貞操を盡せし事<sup>四丁</sup>
- 第五 富久女拮据經營忠實を盡せし事<sup>六丁</sup>
- 第六 波留女忠節を盡して其身を終りし事<sup>七丁</sup>
- 第七 伊智女孝貞の事<sup>八丁</sup>
- 第八 増女父母に孝養を盡し病弟を看護して數  
十年間一日の如き事<sup>十丁</sup>

第九 春女孝貞の道を盡して一家を以て親睦を  
らゝめたる事<sup>十三丁</sup>

第十 留女母の事へて旦敬愛を盡せし事<sup>十三丁</sup>

第十一 登利女篤孝の事<sup>十四丁</sup>

第十二 多津女身を以て父の罪を贖はんとして祈  
ひし事<sup>十五丁</sup>

第十三 元女至孝の事<sup>十七丁</sup>

第十四 初女髻を断て其再縁を拒みし事<sup>十八丁</sup>

第十五 湊女至誠純孝の事<sup>二十丁</sup>

第十六 希世女生前の奉養死後の追福共々至れる  
事<sup>二十三丁</sup>

第十七 守田某の下婢不二女銀釵を捐て學校建築

の費用に供せし事<sup>二十六丁</sup>

第十八 多藝女發狂の主人に忠誠を盡せし事<sup>二十八丁</sup>

第十九 不天女姉妹力を戮せて一家の生活を謀り  
し事<sup>二十九丁</sup>

第二十 小女留女母を救はんとして却て自から溺死  
せし事<sup>三十二丁</sup>

第二十一 衛女夫の死後一家を興せし事<sup>三十二丁</sup>

第二十二 盲女志加裁縫を善くせし事<sup>三十四丁</sup>

第二十三 那嘉女奮發學に志を事<sup>三十五丁</sup>

第二十四 伊志女の孝志兼て従一の節を守りし事<sup>三十六丁</sup>

第二十五 長野縣官吏某の妻より書翰を其妾に贈り  
し事<sup>三十八丁</sup>

目次終

皇朝女子立志篇卷之三

櫻所 干河岸貫一 校閱

遂軒 關 徳

有竹 上野 理一 編述

第一 清水左衛門尉の母勇力あつて且讀書を好  
みし事

清水左衛門尉の母某。一日山上社に詣んとする途中。  
一牛の米を負ひながら。其後脚を斷崖に墜して。甚だ  
困むを見る。牛童の遽て驚き。其負ふ所の苞を解き去  
らんとせれど。牛の崖下に陥らんと恐れ。手を下を能  
くば。牛も亦進退維谷り敢て揺かば。行道の人之を

救ふんとするに亦術なく其危ふきおと實に言ふべ  
らば母某偶此を過ぎ其死地は陷るの慘怛を觀る  
に忍びざれば急を轎に下り雙手を牛の腹下に入を  
容易に救上げて之を中路に冥く衆皆舌を捲て其挽  
牛の力に服せざるものありといへり左衛門尉亦母  
の血統を承けて頗る膂力は富み勇武衆に超え軍に  
從ふごとに功あるを以て自負傲慢往々禮を悖るお  
とまきにあらば母某常に之を誡めて曰へらく丈夫  
たるもの僅に膂力を負み先陣に臨み自から敵を撃  
つぶときは是匹夫の勇に止る將帥の器量にあらば  
昔楚の項羽に巨木を拔き飛雁を睨墜するの勇力

ありといへども戰敗れて終に烏江に歿し漢の張良  
は容貌婦女の如くあれども籌を帷幄の中に運らし  
功は千里の外に立てり夫れ此の如く良將を威あつ  
て猛からば執を以て人を侮らば義を守り禮を執り  
人を憐み惠を施し君に仕えて忠を竭し軍法武畧の  
鍛練を第一の要務とあらべし之に反して徒に  
力量を頼み暴慢無禮あるときは禍必だ其身に及ぶ  
汝少く之を思ふべし而して常に自から逍遙を  
禁じ間居して書を読み文を學び智謀勇畧俱に人に  
超えられむいづも之に畏服せり

有竹子曰く婦女子の勇力あるに敢て稱すべきもの



の心あるのみ。顯如上人の母は、嘗に其一端に就て言はれたるの言るれども、之より由て亦其他を推知すべきあり。

第三 毛利元次の女某伶俐活潑ありし事

周防徳山の城主毛利元次の女子某性柔順なりて、而も伶俐七歳の時母を喪ひ、姆婢の手に生長せしを以て、姆婢等其幼穉あるを侮り、數々旨を戻りて、輕蔑を爲るのあと有りしが、十一歳に迫ひ、或時母を請ふて、細針一百を持來らしめ、豫め姆婢の數四十二を度り、香と與ふ之を裏み、盡く姆婢を召して一々に昇えて之を吞ましむ。皆驚き辭して曰へらく、吾等鄙賤といへ

ども、胡爲れぞ斯る針を吞むべけんや。君強ひて之を勸むれむ。大主は聞せんと、女は之を見て、瑣細の物之を服するに、何の難きとあらんやといへど、皆固く辭して服せば、是に於て女は姆婢に向ひ曰ふやう、汝等我を以て、幼少なりと、侮るは侮慢をいへども、我も苟くも汝等の爲には主君あり、他日戒慎せざれば、則ち我を以て家君に告げんと、辭色儼然平生を似む。姆婢等戰慄して陳謝する所を知らず、適ち元次室に入り、其言を聞て大に感ず、衆に誡諭して、深く之を謝せしめられぬ。

有竹子曰く、僅々十一歳の幼女子にして、何の知覺あ

らんや。而るも猶能く此の如き奇喻を以て、婢等と一言の下に屈せしむ。其性の伶俐活潑ある固より尋常人の學び得る所あるべし。他日の成立亦以て想見すべきあり。

#### 第四 也須女貞操を盡せし事

常陸那珂郡野上村の農與次右衛門の妻也須女。初め嫁して未だ幾くあらざるに、與次楊梅瘡を患へ、面皮腐傷し、人勢も亦墜ち、永く配偶をべからざるを慮り、或日也須は曰へるやう、卿年尚弱く、容貌も亦醜からず。然るに今廢人は從ふて一世を終るは、我卿の爲め、甚だ痛む所あり。且婦女たるものへ、老て其子に頼

るべきに、今我の疾たるや、萬胎生するの理あり。故に卿も再び良人を選びて、後の圖をたはべし。也須泣いて答へて曰く、妾已に良人に配を。今其廢人たるを以て之を棄去するは、人情の忍ぶ所あるべし。況んや妾去れむ。復誰か老姑を養ふべきと。與次猶之を強ひて可らむ。也須終に己を得て、將さふ自裁せんとするに、與次之を見て驚き遽て是より復た言はせしめて、其意より任す。也須悦びて老姑に事へ、病夫を看護する。いと愈厚く貞操を守ると益固く。與次の病年を経て愈ること多く、一家の貧窮は、一日より甚しきを以て也須獨拮据經營し、自から鋤を把つて耕耘の事に



從ひ。その餘暇も、病夫の介抱少しも怠らば、水戸義公或時其邑を過きて、也須の田を耕をば見、傍人に問ふて其實を得、大に之を志を感賞して、自から也須の家に行き、病夫を訪ひ、手づから金を也須に賜ひ、命じて田園の租税を除き、以て閭里に表せしむ。  
有竹子曰く、婦人の力以て其身一人の口を糊するも、猶難事たるやを疑はしむるの今日に當り、能く老姑に奉じ病夫を養ひ、百苦千辛、更に辭する所なく、一家三人の飢渴を支へて餘あるもの、之を節婦といはんか、將た賢女と稱せん。蓋し亦多く得べからざるものあり。

第五 富久女拮据經營忠實を盡せし事

甲斐國八代郡木村農夫六右衛門の母富久女は、元同國都留郡忍草村の里長五郎右衛門の妾婢たり。里長の家初め富饒ありしが、中頃稍衰微するに隨ひ、田を鬻ぎ家と典し、窮困日に迫るの時、方り、主人偶惡疾を患へ、數年の間自から起居する能はず、然るに富久女善く看護し、五郎右衛門を負ひ、幼穉の小兒を携へ、峻山を踰へ、險路を過ぎて、我子六右衛門の家へ憑る。六右夫婦亦俱し心を竭して之を奉じ、家に素より貧乏なりしが爲め、力の給せざるを憂へ、富久女自から比隣の人にお乞ふて、其業を助け、僅少の賃錢を

得て米に換へ或は已の食を割て主人父子と與へ身は敝衣を纏ひあがら衾を求めて主人に供し或ハ寒夜我肌膚を以て主人を温ため夏夜ハ扇を把て終宵蚊を拂ひ其子ハ書を學ばしめ日夜勵精怠らしめ其爲をいふる恰も我親ハ事え吾子ハ育ふが如くして勞を厭ひ苦を訴ふる色曾て面ハ顯はるいおとあり事官ハ聞えて天明八年二月銀三十枚を賜ひ邑の代官も亦金を與へ以て閭里に旌表を

有竹子曰く主人ハ事えて忠實を竭るもの之あり拮据經營其勞を致るもの之あり而して主人ハ事ふるの厚き富久女の如く已の勞を辭せざる亦富久女

の如きは世多く其人あるり否絶へて無くして僅々有るもの殊ふ其困窮中主人の子をして書を學ばしむるの一事も尋常婦女の容易ハ爲し能はざるとおもふ此一美を推して其他の事を知るに足れり

第六 波留女忠節を盡して其身を終りし事

美濃國中島郡冲村の農總内の女波留女といふもの年十一にして河内國八上郡長曾根の農徳右衛門の家ニ仕へ限るに十年を以て此徳右の家素より富豪ありしも漸次ハ衰頽して困窮爲る所なきに至り童僕を去り婢女を遣り田園屋舎貨財を賣り家産蕩盡して一衣刺さば波留女も亦將さに遣歸されんと

まゐる方り泣て辭して曰く主公の意を得ざれども竟に奈何ともまゐるまけども若然らざれば恩を蒙るおと數年より一旦主家の危急を傍觀し去るは人情の忍ぶ所にあらず願くば從ふて長く艱難を與ふせん徳右夫妻之を聞て其志に感ず波留女の意に任る女是より精氣勵ましく心破き千辛萬苦以て主人に奉ず人の堪え得ざる所は堪え人の忍ぶ能ざる所を忍べり時不徳右病に罹り自から起臥する能く妻も亦多病常に床に就く波留女垢衣を羞むる惡食を厭むる一に夫妻を養ふを以て心と爲す一夜徳右茶粥を食せんおと欲れども染ありて薪を

波留女百方苦思れども得る所あり終に已を得て竊に隣家の藁三把を携へ歸らんとする時隣翁偶之を覺りて來り拘む波留女藁を地に置き頭を叩て具さに事狀を告げ罪を謝して曰へらく若しかければ一家三口の飢渴目前に在り妾は敢て厭むる唯老夫妻の艱苦を如何と聲淚俱に下り誠實の色自然に顯れたる隣翁も大に之に感ず自から藁三十把を携へて之を畀えり天明五年に至り徳右終に死し其翌年事官に聞えて米十石を波留女に賜ひ其忠節を表す時年五十其後猶主母を養ひ賜ひ拜して終る

朝一三三多 卷之三  
有竹子曰く波留女年十一始めて主家ニ仕え褒賜を  
得るの時も恰も五十あれば其間四十年の久き一  
日の如く主家に奉むるの心少くも衰えぬ況や徳  
右の死後猶其妻ニ事えて身を終ふるの忠節に於て  
をや只其竊ニ隣家の藁を携去るの一事は稍其道ニ  
非ざるが如くなれども隣翁の之ヲ志ニ感トテ三十  
把の藁を畀ふるに於ては亦其誠意主に奉むるの餘  
み出て萬々已を得ざるの窮策たるを視るに足れ  
り波留女の如きは誠ニ奇特比ふべきの女子と謂ふべ  
し

第七 伊智女孝貞の事

豊前國某郡上矢部村の農民彌兵衛の妻伊智女とい  
ふものあり夫並み其弟共に惡疾ニ罹り姑ハ眼病を  
患ひ之が爲めに所有の田産皆蕩盡して貧困の極ニ  
迫れり伊智女此間ニ在りて獨看護に心を盡し耕耘  
の暇ハ山に入て薪を拾ひ自から負戴して市に鬻  
き一婦の身ヲ以て四人の口を糊し其苦勞ハ不堪  
えぬ彌兵衛之を見るに忍びぬ一日伊智女ニ向ひて  
曰ふやう吾不幸なりて此病ニ罹り自から其體を見  
るだ猶之を厭ふ況や他人をや汝年猶若し幸ひに  
家ニ皈りて再嫁を求めよと伊智女涙を垂れて答へ  
らく嗟是何の言ぞや夫婦ハ一體なれど良人の不幸

は。即ち。妾の。不幸あり。安逸。す。て。合ひ。患難。あつて。離  
るん。は。何ぞ。妻を。要。ま。べ。き。良人。か。ゐ。る。無用の。心。成  
勞。て。徒ら。に。病體。を。悩。ま。し。事。あ。れ。とい。ふ。て。益。心  
の。限。を。盡。て。看護。せ。れ。ど。終。は。彌。兵。衛。は。死去。せ。り。伊  
智。女。悲。嘆。の。あ。ま。り。殆。ど。朝夕。の。食。を。廢。ま。る。至。り  
が。稍。く。葬。儀。を。手。厚。く。營。み。夫。より。獨。貞。節。を。守。り。姑。叔  
に。事。え。て。孝。養。至。ら。ざ。ら。と。あ。る。あ。村。人。其。年。若。く  
て。百。の。辛。苦。を。嘗。む。る。を。憫。み。外。は。嫁。せ。ん。と。を。勸。む  
る。に。皆。之。を。辭。し。て。曰。ふ。や。う。吾。年。若。し。とい。ふ。を。も。一  
たび。人。の。家。に。嫁。し。て。再。離。せ。ん。は。女。の。道。に。背。け。り。且  
家。に。盲。姑。廢。叔。あり。吾。去。れ。ば。將。た。誰。あ。つ。て。之。を。扶。く

べ。か。い。て。節。操。終。始。一。の。如。く。孝。養。の。心。少。く。も。衰。え  
ど。領。主。其。孝。貞。を。感。づ。て。屢。金。穀。を。給。し。死。後。猶。碑。を。建  
て。之。を。旌。表。せ。ら。は。

有。竹。子。曰。く。夫。婦。も。人。倫。の。大。綱。一。た。び。ふ。れ。と。齊。く  
し。て。終。身。改。め。ざ。ら。は。婦。の。德。あり。安。逸。す。て。相。合。し。  
患。難。あ。つ。て。相。離。る。と。きは。何。ぞ。妻。を。要。せ。ん。と。の。一  
語。即。ち。其。婦。德。を。全。ふ。ま。る。と。あ。る。の。大。要。す。て。夫。婦  
の。常。倫。た。る。もの。竟。は。之。に。外。あ。ら。ば。伊。智。女。は。田。間。の  
匹。婦。す。て。教。養。素。あ。る。もの。お。あ。ら。ば。而。し。て。猶。能。く  
此。言。を。發。し。此。行。を。爲。さ。世。の。滔。々。定。操。ま。く。朝。に。吳。家  
に。嫁。し。暮。に。魏。氏。に。適。く。もの。宜。く。之。を。鑒。む。べ。し。

第八 増女父母に孝養を盡し病弟を看護して數

十年間一日の如き事

備中國某郡山路村犬飼源六の伯母増女といふもの、  
幼き時より心操正しく父母並に弟ともに病床に就  
き一家の生活殆ど支えざらんとき、増女裁縫の  
事に長じ日夜之を以て生活と裨け、藥餌を調へ専ら  
孝養を盡せしが、特は裁縫のみあらば習字絲竹の道  
にも達したるがうへに、性質さへ柔順なれど之を娶  
らんとするもの多けれど、更な肯はむ妻若し他は適  
けべ、病床にある父母と弟と如何をべきといふて、  
十九二十の若盛りにも一日だふ容づくらば貧苦の

中に許冬の年月を涉りて、四十七歳なれるとき父  
は死去せり。依て弟に家を繼せ、妻を迎へて男子  
を設けたまはば、是より於て少く安心の地は就んと  
するに及び、其妻も亦偶病に罹りて鬼籍に上りしかば、  
増女獨り又病母病弟を看護して、傍ら幼兒を養育し、言  
ふべからざるの艱難を極め、更に志操を撓ま  
せ、夙も興き夜に寝ねて拮据經營の功を積み、  
一、二反の田畑をも買得るに至れり。斯くするほどに、  
已も既ち六十にあまれる老嫗となり、尋常人の嫗か  
らん、は子弟を扶けられて、老境の餘命を樂むと  
ふかきとも、増女は却て病弟幼兒を愛育して、辛苦を



安んじむ。おと。數十年間。一日の如し。此事終は官ふ聞え。其裁縫習字に達するを以て時の縣廳より特は命じて。小學校女子の助教とせり。

有竹子曰く。女子の人と嫁するは常の道なり。然れども時と勢とに由ては其常道を履む能むものあり。此増女の如き即ち是なり。只其盡すべき所を盡せむ。出て人と嫁するも。家に在て親を養ふも。皆齊く婦人の道たり。固より彼是の間は差等あるべきふあらざれむ。女子たるもの各遇ふ所の時と勢とに就て。其宜きふ處をれむ可なり。

第九 春女孝貞の道を盡し一家をして親睦から

しめたる事

信濃國伊奈郡上飯田村の商民小林平四郎の妻春女といふもの。其人とあり溫柔貞淑。姑と夫とに事え。孝貞の道を盡せり。元より富める家からぬ。八人の男女ありて。其衣服飲食に至るまで。春女一人の手にて調度し。備さに艱苦を嘗むるといへども。姑慈愛の情なくして。之は遇するや甚だ慘刻なれむ。夫も已むを得ず。已は離別せんとせしをりから。姑重病は罹りて。是より起居常に自由あらば。然るに春女は姑の側に在りて。醫藥を進め。飲食を調へ。姑の好む所のもの。あれむ。意を注いで之を求め與へ。或は揉み。或は撫で。廁

に行くときは手を挽き腰を推して扶くる等晝夜の看護至らざる所なく尋常の人が爲に能わざるの如くをあり忍ぶ能はざるの業を忍び十年の間一日の如く侍養少くも怠らざれば如何に無慈悲ある姑の心も早晚和らぎて最も睦くあるに至る。

有竹子曰く舜の孝心能く瞽瞍の頑を化して善に至るゝむるの時あり苟くも誠意の貫くとある金石猶透るべし況んや其他をや春女の一誠姑は奉じ夫は事ふるの外は餘念なき不仁無慈の姑心を以て相和し相親しむに至るゝむる固は怪しむ不足らざるあり。

第十 留女母に事へて孝養且敬愛を盡せし事

三河の國岡崎の近在は北野村といふ所あり此村に住める利右衛門の姉留女は弟と俱に孝心深く父は早く死して母のみ存ざれば留女利右と之に事えて自分等ハ常に菽麥を食へども母の奉養は甘旨を極め其進食の時も陋巷に住める賤しき身ながら膳を日よりも上と捧げて禮を盡せり之を見倣ふて母の箸を執らざるはどむ幼童といへども先だつて食せず又冬夏の衣も母は着るゝは必ず新らしきものを以てし自分等が服もゝに必ず古きを以てし又冬の日外より飯り母の勞はりて爐に倚るといへど



壯者かれど體温かありといひ、敢て火に近かばふれども、時々は母の意を慰めんが爲に、爐の側は居るゝいへども、跪坐して、恣に手足を伸べむ。其平生の敬愛は大概之を推して知るべし。時人ありて留女を嫁を勸むれど、之を聴かず、常に留女は内お在りて家事を幹理し、利右は戶外の耕稼を勤め、年を積むに隨ひ家計も稍優かにあり。凶年に遇ふも、租税は苦むお至らざるの餘裕を得るお至る。平生如此の謹慎深きものあるが故に、朝も起きて先づ國城の在る所を拜し、夜寝るおも國城を趾にせむ。差役に當れむ人お先だつて赴き、常に藁と繩とを蓄えて、風水の變は備へ

持お家事經營の一方お力を盡すのみあらば、郷里の爲も心をを用ゐるゝ率ね此類多し。是を以て郷人皆姉弟を敬慕して、慈父良師の如き思を爲せり。事領主に聞えて、米二石銀四十兩を賞賜し、以後猶毎年二石の米を賜ひて、孝養の資とあさめ、別は又銀四十兩を留女に賜ひ、又歳ごとに一口の廩米を得せめ、行實を石に刻して、其間を旌表せられけり。

有竹子曰く、人子たるものゝ其親は孝養を竭きは固より賞賜を得んが爲はあらば、然るも天の惡を憎み善を好むの切ある、賞賜自から孝子の頭上は落下は、是人力はあらば、て天の然らむる所あるべし。詩

に云く孝子匱からば永く汝は類を賜ふと此言信あり。

第十一 登利女篤孝の事

三河の國額田郡古部村は登利女といふものあり家貧くして父母を養ふの道かきが爲め其身人に雇はれて稍く朝夕の烟を立てるうち父偶病は罹りほどに醫藥の費用も大形あらで困迫極まりしに毎朝早く起き霜を履みて薪を山林は採り之を岡崎の市に鬻ぎ其價を以て療養の資とあり古部より岡崎まで三里有餘の道をも比隣の如くに看做し男子も堪ふ可らざればかりの重荷を負ひて日々と往來し

又藥を求むる爲め池鯉鮒は往來する此道は殊に七里にあまれるを只咫尺の間の如くおもひける其辛苦言ふばかりあり此の如くは勤めて父母の衣だけは暑寒の節を失はぬやうに設くれども未だ衾を具ふるおと能むぶが故に寒氣は草を緝めて被とあり自分の肌を以て交るく父母を温ため又夏日は蚊帳をかきを以て樹葉を編み之を扇に代え終夜睡らばして蚊を駢り父母をして安眠せむ是等の事ども領主は聞えて其篤孝を賞し毎年三口の俸米を給ひしかば登利女深く其君恩を記し領主の卒せられたるとき米薪を香火院に奉り且月ごとく墓前に

詣り拜るること身を終るまで闕かど、其後領主より  
登利女が父の典賣せし田畑山林を贖ひ返して、長く  
租税を免し、以て登利女の孝行を旌表せられぬ。

有竹子曰く、昔晋の西河の人王延は、親より事えて至孝、  
夏も則ち枕席を扇ぎ、冬は則ち身を以て被を温め、隆  
冬盛寒も、體常より全衣多く、而して親は滋味を極む  
といへるおとあり、今登利女の事、暗に之と相符する  
は、尤も奇と稱すべきあり。

第十二 多津女身を以て父の罪を贖はんおと  
請ひし事

土佐國吾川郡伊野村農中田樂三郎の母多津女、年十

一の時、父は痲痺を煩ひ、母は痲痺に苦しみ、俱より病  
牀より臥し、るに多津女、幼少の身を以て、日夜兩親を  
看護し、六歳の弟をも養育せり、樂三郎病鬱のあまり、  
恣に食物を好み、之を辨ぜざれば、則ち怒りて叱り罵  
るに至るも、多津女之を堪忍ひて、其意に應じ、無きも  
のをば遠方までも求め、自分は食を斷つて、父母の病  
を平癒せしめ、賜へと祈誓せしめ、あど、更ふ九兒の及  
ぶ所にあらず、然るに父樂三郎故ありて、徒場より入り  
かむ、母の病勢之が爲め、加はり、漸次危殆におも  
むくのみり、弟も亦常に癩症にて、時々氣のかかはぬ  
まゝに泣叫びあどるを、多津女彼是と賤し、勞する

といれど父は徒場は繋がれ母は病牀に卧し弟は  
幼りて病あり多津女とても此時稍く十六歳殊に  
困窮に迫るものあれば更に活計の立つべきやう  
なく是より於て多津女自から縣廳に到り妾身一人に  
して母と弟を養はんといれど力及ばず願くは妾の  
身を以て父の罪に代らしめ父の家へ返り賜ふ父  
の働みて母弟俱に飢を免るべし果して然らんか  
親子三人の露命を繋ぎ得て妾の孝道も自から立ち  
申へべしとの事を嘆願されど事行まれざりしうに  
其後復書を上つりけるも多津女の誠意竟に達して  
父の罪を免され多津女は世に稀ある殊勝の兒あり

とて金千匹を賞賜せられぬ。

有竹子曰く昔漢文帝の時少女緹縈身を以て父の死  
を贖はんと請ひしとあり今多津女の縣廳に嘆訴  
する所之と相同くして孝心天に貫き誠意人を動か  
し竟に父の罪を免れしむるに至る是真の孝女と謂  
ふべし。

### 第十三 元女至孝の事

淡路國津名郡に元女といふものあり父を四郎兵衛  
と呼び母は早く亡いて四郎兵衛六十四五歳まで漁  
獵を以て世を渡りしが嘉永二年中風を煩ひ口言ふ  
能まば手足屈伸自由あらばありとける元女の夫三

吉は養子にて、女子二人あり。一は見捨て、十年以前本  
生に歸りし。かど、元女未だ若き身ながら、節操を守り、  
獨身にて日々海邊にゆき、少々の雜魚を漁師より求め  
て、之を賣歩き、其暇にハ紡織などに雇はれて、辛苦を  
盡さうちるも、父の病を嘆き、夜は寢ざりて父の背を  
撫で、其介抱に怠らば、然るに父も言語手足の心に叶  
はざり、まゝに聊の事をも、怒り罵るといへども、更  
之は忤む。衣服へ更あり、好める酒をも、日々は購ふ  
て、勧め、孝養至らざる所あり。夫だは常人の爲に、た  
き所あるを、叔父長右衛門といふものあり、是も獨身  
なるが、一二年來病み罹り、同トく困窮に陥りたるを、

元女此家にも往來し、晝夜心を盡して看護せしが程、  
 かく叔父の果たりしにば、埋葬を始め、吊葬に至るま  
 での諸費、皆元女の力を以て之を辦し、其叔父船一艘  
 を所有をれど、是は相續人に遺さるべしとて、彼貧窮  
 の中に在るも、之を賣らざりて、後存しおきける如  
 きに、丈夫も及ばざる所あり、事領主に聞えて、一口  
 を賜はりたり。

有竹子曰く。孝子の以て孝子たる所のものい。其行の  
奇異あるに在らば。其心の殊勝あるに由る。其心  
の殊勝ありといふは。他はあらば。子たるの分を盡し  
て怠らば。以て父母の心不安んぐる。即ち是あり。夫是

を之眞の孝子と謂ふ。

第十四 初女髻を斷て其再縁を拒みし事

相摸國津久井郡若柳村の農孫四郎の女初女といふものあり。孫四郎男子あきを以て、初女の十八の年、同村の治兵衛といへるを迎えて、初女を娶はく程なく男子を生めり。固より貧しき生計ある處へ又一子の出來たれば、家族五人とあり。僅ばかりの田地持ちて、農業に力を盡し、夫婦睦く老たる父母に事へけるうち、夫治兵衛は持病の痰症烈く發して、次第に危篤に赴き、百方治療を加えたれど、其效あらばして、終に黄泉の人とあまじり。初女の愁傷譬へんに物なく、殊

に其頃しも懷妊せし月満て、女子を分娩し、夫の病中より引續きたる藥餌の費用、葬祭の儀節に要する所の金銭は、初女一人の手より之を辨じ、且出産の費用もかりて、許多の負債を爲し、一層の貧苦を加へしむ。親族の者之を危ぶみ、後夫を迎えて之と俱に嫁ぎあふ。大に其便利を得る所あるべしといへば、初女之を聽かざりて曰く、先は夫の死せしより、一家の事を舉げて、此身に負ひ、固より多少の勞苦あきにもあらざれども、苦しみ中の樂む二人の子は、夫の紀念と思へば、左のみ勞苦を身は覺へず、只苦みを樂みとして、兩親に事あらば、妾の願ひて、之を女の道と思へ

り。今更二人の夫に見て。新たふ一の苦を添むや。再び此言を發し給ふ勿むといひて。翠髻梳らば脂粉施さる。千辛万嘗め萬苦を喫いて。家事を理め耕作を勤め。兩親は事え兩子を育つるの外に餘念のあらざり。一は親族の者は猶其再縁を勧めて止まざるに由り。初女涙をおさへて起ち直ふ一室に入り。剃刀を以て髪を斷り。長を髻に手むて。親族の前に出。其決志の程を示しかれむ。親族のものも之を感。復一言をも發せざり。夫より益々心を勵まして。晝を耕し。夜は績して。力の限り働きけり。父孫四郎其性頑として。家の有無も顧みず。常に甚く酒を嗜めども。初女が行

狀は感。屢飲むおとを斷んとせし。老たる御身をもて好み給ふ酒を止む。給ひあべ。保養の道にあらずと諫めて。日ごとに必々づい買求めて。父の身と終るまで。一日も酒を欠かすことな。又田畑は出る時も。父より重き荷を負はせ。自から之を持運び。暇あれば人の家へ傭われゆきて。晝夜勞動するに依り。家産も稍優かみありて。上納の租賦は更にも言はる。家内の衣食も缺ることなくあり。一は全く初女一人が至誠の致をとおろそ謂ふべし。

有竹子曰く。女子の年十七八の間は。之を四時に喩ふれむ。即ち春あり。駉蕩の風和りて。花香鳥聲到ると



ある陽氣の發揚あらざるなく、是に於て、臘脂紅を  
染めて、多情の容を賣るものあり。鉛粉白を抹いて、可  
憐の粧を誇るものあり。蓋し是普通の人情なり。世  
間滔滔皆然らざるをあり。然るに初女は此間不在り  
て、敢えて媚斌の態に習はぬ。艶冶の風は染らば、亂頭  
汚服、孝養を盡すの外は、復他顧なきは、之を鬱々たる  
蒼松の節に比さべく、葱々たる翠柏の操に喩ふべく、  
嗚呼賢婦あるか。孝女あるを。

## 第十五 染女至誠純孝の事

日向國那河郡下方村は染女といふものあり。鹽を煮  
るを業とあり。二歳の時に父を喪ひて、母の手は成育

せり。家に年老たる祖母と伯母の愚痴あるとあり。  
て、生活自から意の如くあらざる處へ。染女は五歳の  
時火災は罹りて、家屋什器皆焼失せり。是に於て鹽焼  
く小屋の内に竹床を編み、稍くにして雨露を凌ぎ、  
七八歳の頃より母眼病を患へて、家道益々衰へけ  
れど、染女幼穉の心をも深く之を憂へて、愚痴ある伯  
母をがら之と力を協はして、朝夕稼ぎけれど、年少き  
女子の身として如何をも爲さばやうのあらざる  
を。毎日纔に一囊の鹽を擔ひて、近里の知人に鬻ぎ、  
米麥の類は替えて家に持歸り、一家四口の生活を立  
つるうち、伯母は病は卧して死し、母の眼病は次第に



劇くありて癒へざるゆゑ。同郡の福島といふ所は良  
醫あるを聞き、母を伴ひゆきて、治を乞はんとすれど、  
如何とせん。一錢の貯蓄あけきべ。近隣の人と謀りて、  
之を借り、福島に伴ひ行り。是、漆女が十二の年あり、  
然るに母の眼病竟に癒えず。明を失ふに至り。祖母  
も頗る老耄し、けれど、漆女は兩母介抱の暇も、自から  
薪を伐りて、鹽を焚き、毎朝星衣戴きて家を出て、焚た  
る鹽を鬻ぎつゝ、千辛萬苦をといへども、聊も倦める  
氣色なく、夜臥をとても、只一の蚊帳と一の蒲團の外  
にあらば、蚊帳は破れたるを綴合せ、蒲團は小くして  
薄く、兩母の寢具とも猶足らざるほどなれば、自分は

夏冬とも、鶉衣を着あがら、其側み卧し、未だ曾て一日  
も心を安く暮せしとあり。飢肥藩知事郡を巡りて、  
漆女の行狀を聞き、感嘆の餘米五斗を賜ひて、其孝志  
を旌表す。是、漆女が十六歳の時あり。是より愈々勵み  
て孝養を盡せし。祖母は其内に死去し、母は又帶下  
の病を患へ、飯を食せざ。只酒と菓子のみを嗜みけり。  
ば、常に求めて之を供し、夜も寝どして看護まらうと。  
病已に崩漏にあり、時々裳裾を汚し、其臭穢近づく可  
らざるをも厭ふ。洗ひ淨めて母の心を慰めけるに、  
病勢重りて、間もなく死去し、一月の間に二母を喪ひ  
ける。おとゆゑ、漆女一層は悲慟を極め、尋常の女子た

ふ。い。ん。は。一。時。周。章。し。て。爲。す。所。を。知。ら。ず。殊。に。貧。苦。の。際。喪。祭。の。儀。を。營。む。お。と。も。能。は。ざ。る。べ。き。と。漆。女。十。六。七。の。小。女。子。し。て。能。く。之。を。葬。儀。を。辨。し。死。者。を。い。て。地。下。に。憾。あ。か。ら。し。め。たり。其。後。或。人。漆。女。の。奇。特。ある。志。行。を。聞。き。訪。來。り。て。漆。女。に。向。ひ。汝。幼。う。て。父。を。喪。ひ。母。と。祖。母。と。に。事。え。て。十。餘。年。を。經。今。日。に。至。れ。り。と。う。其。間。何。事。う。尤。も。困。苦。の。甚。し。き。を。覺。え。た。る。や。と。問。ひ。し。と。漆。女。涙。を。拂。ひ。妾。貧。し。き。家。に。生。れ。た。ま。ば。固。より。困。苦。を。分。し。ま。る。所。三。日。食。は。ざ。る。も。困。苦。を。覺。へ。ば。一。錢。あ。き。も。困。苦。を。覺。へ。ず。暑。に。日。を。掩。ふ。こ。と。能。は。ざ。る。も。寒。に。衣。を。着。る。お。と。を。得。ざ。る。も。亦。困。苦。と。を。

る。に。足。ら。ば。只。一。の。困。苦。に。堪。へ。ざ。る。も。の。あ。り。母。の。世。に。在。る。や。常。に。妾。に。語。り。て。家。火。災。に。罹。り。し。より。此。矮。屋。に。起。卧。ま。る。の。不。自。由。あ。れ。ば。早。く。新。宅。を。營。み。て。之。に。移。住。せ。ん。と。い。へ。り。し。と。ど。朝。夕。の。烟。さ。へ。立。つ。る。お。と。能。ま。ざ。る。身。あ。ま。ば。母。を。し。て。其。願。を。遂。げ。ざ。り。て。死。し。至。ら。し。め。たり。今。之。を。思。へ。ば。食。も。旨。か。ら。ば。居。も。安。か。ら。ば。是。妾。が。一。生。の。困。苦。あ。り。と。答。へ。し。に。或。人。深。く。其。志。を。感。じ。て。米。一。俵。を。與。へ。し。と。漆。女。固。く。辭。せ。り。と。強。て。與。ふ。る。に。由。り。漆。女。涙。を。流。し。これ。を。受。け。て。母。の。靈。前。に。供。せ。り。此。時。年。二十。と。し。て。容。儀。卑。し。か。ら。ば。言。語。鄙。し。ら。ざ。れ。ば。里。人。皆。之。を。敬。憚。せ。り。と。ぞ。

有竹子曰く、深女は日向の偏陬に生れ、年四五歳の時より、己ふ其至孝の志、斬然見るべく、其後十餘年の久き、孝養を盡して怠らざるや、老婦も及むべし。男子も耻する所のもの多し。況んや或人、答ふる所の如きは、一言以て其志の在るとあるを看破するに足るべし。深女の事に至ては、已に喋々の多言を費さず、須ひむ。只是至誠純孝の四字を以て之を評定せんのみ。

第十六 希世女生前の奉養死後の追福共に至れる事

豊後國某郡笠和村に希世といふ女あり。父は三歳の時母は十歳の時死去せし。父兄の家を養えれ。

稍成長するに及び、同村彦助といふもの、家の婢とあり。十九の年房吉といふものと夫婦になり。其後房吉は癩疾に罹り、自から起臥する能はざるを、希世女一人の手業する。夫と年老たる姑とを養ひ、貧苦の中に稍く一通りの衣服夜具まで見苦しからぬものを調へて、夫と姑と進め、身は褌褌を着けて、夜は蒲團をも身に着けぬ。其まゝ姑と夫との側臥し、夜の明ざらうちより起出て立働を、其堪がたき勞苦を、夫房吉も見兼ねて、希世に向ひ、吾病は竟に癒ゆべきものにあらば、殊に汝も年若き身なれど、去て他へ嫁し、一身の安樂を謀るべしといへど、更に肯まじ。夫の斯

く言はるゝ。全く吾爲る所の病を厭ふさまに見ゆ  
るが爲あらんと。是より彌増心を盡して看護し時に  
は人の家又傭はれゆくに憊ふべき時も憊むべし何  
事となく手早く片付けて家へ皈り復家事を勤め平  
生の艱苦至らざる所をければ最初氣強かり姑も  
我を折りて遂に其實の娘の如くに遇をうふとまあ  
りけるほどに房吉も病中ながら母と妻との中睦  
きを慰みて快く月日を送りたり然るに房吉の病勢  
日に添へて常々一室にのみ籠居せり其氣鬱を慰め  
んが爲め希世女之を負ふて庭に出で艸木の青々た  
るを見え樂ましく或ハ寒氣烈しく手足の冷ある時

は己の肌に入れて之を温め面腫れ鼻塞がり苦む  
時ハ臭氣の甚しきをも知らず鼻汁を吸出し恰も小  
児の乳を吸ふが如く如何にも甘味のあるにやと思  
ふばかりに厭むるも氣色を見せぬ夫の病の終に治  
まべからざるを見ては其期に臨み狼狽して葬儀を  
行ふふと能わざるときハ耻是より大あらむありと  
女心も少々ばかりの金錢を漸次蓄へおきしが  
夫の死を及び之を以て他の助力を仰がむ其葬  
儀を営むことを得たり又早く實父の死をるのち母  
修驗正徳院といふものお馴染め居たれど希世女も  
母の存生中此正徳院の養育を受けたり然るに其後

正徳院年老て貧苦の甚き自から給まるゝと能わざるを以て遂に希世女を慕ひ來れり。希世女幼年の時之恩義を忘れず之を別宅におき夫と姑との外正徳院を併せて三人の奉養を一人の身ふ負ひて怠らば夫の病ふ侍る。十三年の間を経て夫死するのち姑と正徳院とに事あり。又十五年の久きに及べり。終に母も死して猶正徳院を養ひ家に在て實父母おふ。夫姑の靈牌ふ事ふおと生けるふ事ふが如く夏の夜は靈牌を蚊帳の中に入れ團扇を以て之を扇ぎ冬の夜は靈牌を懷ふ入る。之を温め毫も在世の時ふ異あらば人來つて其再縁を勸むれども固く

辭して肯まば猶強ひて之を勸むるときは復一語を爲さざりて落涙するのみ勸むる者も遂に自から愧へ去る。時の領主其志に感して金穀を與へ奇特を賞する。總て七回又及べり。

有竹子曰く去者は日ふ疎といへる世の諺の如く死者の忽せにやをきへ一般の人情ありて孝子義孫といへども或は之を免れざる所然るに希世女ハ其生前に奉ざるや已に彼の如く死後は事ふるや復此の如く生前の奉養死後の追福皆至らざる所なき此女の如くありて女子の道始めて完く毫髮の遺恨なきものと謂べり。吁寔に其名に負かざる希世の女

子あるか。

第十七 守田某の下婢不二女銀釵を捐て學校建

築の費用に供せし事

周防國熊毛郡室積村に小學を建立せんとして同村  
住居の士族守田英淳が家に其所の取締役並に教員  
等相會して學費の事だ商議せしに金錢に係る話に  
至れば皆頭を傾け眉を顰むるが一般の習弊まで頓  
ゝは決定すべき模様の見えざるまゝ其家の下婢不  
二女といへるもの側より之を聞き資金の完備  
せざるが爲めに貴重の學校も建築の舉を躊躇せん  
は如何と嘆かほしき次第ゆゑ切めても九牛の一

毛大海の消滴も供せんとして已が愛玩するといふ  
の銀釵一枝を携へ出で賤しき妾が寸志あれば資金  
の内へ加へ給はりたいと申しゐるに満坐の者舉つ  
て不二女の篤志を感賞し其請を允けり之は續い  
て英淳の妻利宇子より銀釵二枝を納めんおとな請  
ひ同村の副戸長たり熊野尚輔の妻某より金二圓  
を寄附したれば他皆之を獎勵せられて追々書物  
と納さぬ金圓を投ぐるもの多く竟に學校建築の  
功を竣するに至り不二女が奮起主唱の誠意に  
感動せられて其力に藉るもの居多ありといふべし  
有竹子曰く輓近學校の築造各所に起り寒村僻邑猶

唔呷の聲を聞かざるなく文化の駸々乎進むや其底止まる所を知らざるの勢あり然るも今日の事態を省せば時勢の進潮を察せざる頑固の徒に至ては學校を視て農工商の家に無用ありとまゐるもの猶多きが如し男子として已ま然り況や女子をや復況や下賤の婢女をや夫れ櫛笄衣服の類は婦人の尤も愛惜して其性命をも換へんとまゐるほどのものあるに之を捐て學校建築費用の一部分を補はんとまゐる不二女のおとき物は輕微ありといへども其志の厚き富有者が百圓千圓の獻金をも優るものあり余は今寧ろ不二女が殊勝の志を賞せんよりは他の男子より

て僅々の損金も躊躇をらものゝ無氣力を笑はんとまゐるあり。

#### 第十八 多藝女發狂の主人に忠誠を盡せし事

備中國窪屋郡倉敷大橋久右衛門の婢多藝女といふもの性質柔順として久右衛門の家より來りしより曾て主人の心よそむきたるおとなく十餘年間一日の如くに仕へけるが其うち久右衛門死去して子恒介家を繼ぎたれど年若く家道随つて衰微に至りしうば之が爲憂悶の餘遂に發狂せり百方治療を加へたるに其驗おければ親族相謀りて之を一室の内に幽せしむ病體益加もりて時お亂暴を働き晝夜の差別



をも辨へぬむうりにあり。かば召使ふとあるの男女皆恐きて通づくものあるを。多藝女之に看侍ることは平生の如く聊かも厭ひ嫌ふの念なく又聊かも輕んど侮るの色なく飲食起居總て病者の好惡を察し其意に適はしめんことをのみ是務め晝夜其側を離れず寒中其幽室に蒲團を入れ遣はせば或は汚し或は嚙裂きあどをまをすも徐かに引換えて裂きたる衣綴り汚れたるを洗ひ飽まで主従の禮儀を守りて違背するおとあかれず近隣の者皆之を感ず此事官に聞えて終に賞金賜はりたり。

有竹子曰く婢僕の主家に竭すべき義務は猶人民の

國家に於けると大小の區別こそあれ輕重の等差はあらざるあり故に國家の危急に際しては盤根錯節毫も辭まべからざるあり一家の艱難に當ても亦然り其盡すべき所の道を盡して千辛を嘗め萬苦を喫し身以て艱難の衝路に當り危急の勢を挽回せん是を此國民たり婢僕たるもの義務といふ今多藝女の事は此の如きの時勢と場合ともあらざるが如くあれども他の婢僕皆之を避け一家骨肉の者さく多く之を恐るゝの顛狂人を視るおと猶尋常の如く一意看護して怠らざるは主家に報ふる所の志厚く且切に能く婢僕たるの義務を全ふせしものといふ



べきあり。

第十九 不天女姉妹力を戮せて一家の生活を謀

る事

備後國福山に鐘尾廣助といふものあり。父は早く死  
したれど母と三人の妹を養ひ農業を勤めて一家の  
生活を支へけるうち福山は變動ありて廣助は料ら  
む奇禍に罹りて入牢。母も偶病みて程なく死去せ  
り。外に依るべき親族縁故のあらざれば三人の女子  
相集りて悲泣するの外復爲すべきことのあらざり  
しが姉不天此時年十八悲嘆を忍び自から奮ふて妹  
登女と語らひ斯くては終に餓死するより外あり。婦

女子たりといふ家を保つての道を計らむて。妻に道  
路に食を乞ふが如きの事を爲さべけんやといひ泣  
つ。鋏を荷ふて出れば登女其時年十四姉の言を勵  
まされて供に異に行き姉を助けて耕作を勤め末女  
美加は家は在つて糸車を紡がしめけり美加其時纔  
に十歳あれども能く二姉の志に倣ひ偶門外出で遊  
戯するかと思へば路上に遺れたる馬矢牛糞を拾ふ  
て持皈るまど辨別なき小女ながら二姉の勞と思ふ  
て之を助けんとするの志最も憐むに堪えたり。已に  
三人の姉妹が心を戮せて斯の如くは稼さけるが故  
に租税も滞りなく上納し耕作の餘暇は姉へ機を

織り妹は糸を紡ぎ、之を以て糊口の補とあり。傍ら兄の負債を償ひ、冬夏の候に至れば、必を新たに衣服を整へて牢舎に贈り、兄の寒暑を救ひ、常に貧苦に耐忍び、朝は夙く起き、夜は早く戸を鎖して身を守るに由り、近隣の少年子弟も敢て來り犯すものなく、其貞實友愛の行狀、頗る感ずるに足るものあれば、官之が奇特の志を賞して、金圓若干を賜はりぬ。

有竹子曰く人の此世に生るゝや、必だ自から衣食して、其生計を營むべきの務を負担せり。然るに或は父祖の餘慶に頼り、或は他人の救護を恃み、以て今日の世を渡るものも多きとはいへ、其餘慶已に盡き、救護

已に絶へたれば、勢ひ自から衣食するの道を計らざるべからず。殊に婦人の如きは、皆男子に委頼するの習慣とあり、自然獨立の精神乏しく、爲め、往々自活の計を爲さざるもの多しといへども、其身の健壯ありて、其志の鞏固あるとき、復何事を爲さべからざらん。況や區々たる其一家の生計をや、此不天女姉妹の事を見ても亦知るべきあり。吁、不天女姉妹の如きは、卑屈無氣力の女子をして、其志を興起せしむるに足るべく、淫奔不品行の女子をして、其行を懲艾せしむるに足るべく、婦道の標示、女兒の模範と爲まべし。

第二十 小女留女母を救はんとして却て自から溺

死せし事

筑後國上妻郡一條村の民吉山又次が女留女。天性至孝。幼より父母に事えて孝養を盡せりと。成人も勝るものあり。十歳の時已に自から勞を厭はざりて。日夜草鞋を造り。近傍の市街に携へ行きて之を賣り。其得たるものとあるの錢を以て。父は酒を好み。母は烟草を嗜む。由り此二品を求め。飯り兩親の心を慰むる。其樂みとあせり。然るに或日の事母に従ふて。同村字住吉といふ所へ薪樵に行き。に母誤つて其處ある深堀に陥りたるを見る。と其まゝ。彼孝心の一途より。

之を援はんと欲し。急に水中に投ぜり。斯る幼穉の身軟柔の力の如何で及ぶ所あらんや。其身さへ水底に沈みて。空しく非業の死を遂げたり。之を聞くもの。皆涙を流さざるまじ。事官に聞えて。平素の行狀および。今又母を救はんが爲め。却て身を失へるも。到底至孝の真情に發したるものありといふ。よ由り。父又次を召して。之を祭祀料若干を賜はりたり。

有竹子曰く。小女子として能く父母小事へ。孝心の天稟に出でたる此留女の如くに。して終に其孝心を長く。父母に盡せしこと能ふ。一旦不幸の死を遂げしは。詢に憫む不足るものあり。官の之を祭祀料を賜はり

も、全く其奇特の志や、一般の風教に關するおとの  
訛からざるを以ての故なり。

第廿一 衛女夫の死後一家を興せし事

飛彈國益田郡尾崎村二村清助の妻衛女といふもの  
あり、夫清助は農事の外は釀酒の業を兼ね、多く人を  
遣ひ、晝夜事繁き家あるに、衛女が三十五歳の時、夫清  
助偶病し罹りて、程なく死去せし、かむ衛女十一歳の  
男子を頭ふ、三人の子を抱へて、夫を代り家事を治め  
けり、然るに衛女の年猶若く、殊に事多き家あれば、婦  
女の力能く之を支へ得るおとの難きを慮り、親族集  
議して、幸ひ清助の弟某を入き、後夫とありて、家事に

當らしめ、小兒の生長を待たんといふに決し、之を衛  
女に語りしに、衛女答へて曰へらく、小兒の養育は固  
より母たるもの、當然の務あれば、申さまでもよく、  
家業の如きも、吾女子の身を以て之を治めんとする  
は、大任あれば、夫死して、兒幼あるは、方り婦の其家  
を脩むるは、世間一般の通例あれば、吾愚といへども  
今さら後夫を見へんおとは、生父母の教に違ひ、且世  
間の人お對して、耻づべきおとあるは、由りかの及ば  
ん限り、家業を勤め、以て其節操を全くせんおとをそ  
望みけるに、親族等も其志お感とり、之を許せり、衛女  
是より愈勵みて、家事を経營し、幼兒を教育せし、夫

清助の世に在りし頃は、凶年の引續き、活計も累ひありて、多くの負債を生じければ、此まゝにいつて措かむ。家の衰微を招くの基あるべし。早く償却の法を立てんものと親族も謀りて、各帳簿を點檢せしに、負債の額凡そ六百圓に餘り。今の家産に比較しては、意外の巨額なれば、衛女も一時は驚きしほど。之が爲め却つて益々奮發勉勵し、夙に興き夜に寝ね。家事のみ自身を委ね、農事を始め、釀酒養蚕其外聊かの餘業に至るまで、自から心を配りて、日々帳簿の計算をも、衛女一人の手に辨じ、晝夜盡力せしむ。十年を以て償却し、猶餘財ありて、負債を悉く償却し、随つて家産も恢復し、猶餘財あり。

を以て酒倉を建築せしに至り、兎輩も己の成長せしかむ。各筆算の脩行怠らば、之を勤めしめ、内外の和睦親疎の交際、一も間然あるとあるなく、十餘年間貞操を守り、復一人の之を非議するものさへあらざりけり。

有竹子曰く、女子として自營自活の道を求むべきとは、己の前條に於て之を陳べたり。只世の強壯男子として、衛女が行ふ及ばざるもの儘多きが如し。此輩は宜しく之を視て、自から耻ぢ且奮起する所を知るべきあり。

第廿二 盲女志加裁縫を善くせし事

大和國式下郡爲川村永井佐兵衛の女志加幼くして天然痘を患へ、兩眼明を失ひ、一が稍長むに隨ひ、深く之を嘆じて、裁縫の事、祇學びけるに、忽ち其技、熟練し、平常之を以て活計と爲るに至れり。其裁縫の巧あると、有眼の婦の及ぶとあらず。且夜中闇室に在つて業を營む。燈光を頼むにおよばず。孜孜として日夜勉勵するが爲め、營利を得ることも甚だ多しといふ。

有竹子曰く、人苟くも勉強する所あれば、何事か成らざらん。何業か遂げざらん。只一の奮發心あるに由り、終生屹々草木と俱に朽るに至つて已む。夫れ盲人を勉強すれば、猶且此の如きあり。況や兩眼炯々たるものに於てをや。之を視て大ひは顧省せざるべけんや。

### 第廿三 那嘉女奮發學志事

美濃の人小林某といふものあり。曾て讃岐國高松お香川縣といふを置かむ。頃其縣の典事お任せられ、家族を率ゐて任地に移れり。其女那嘉時、年十四五歳あり。高松の地故郷の美濃と違ひて、文學盛りお行まれ。到る處誦讀の聲を聞かざるをきを見て、自から奮起し、謂ふやう。方今開明の世、女子と雖ども、文學は志ざして、昭代の恩に答へざれば、生く此世も益



なく終ふ無用の長物あり無く聞く東京へ文化大に  
開け、全國第一の都會ありと吾いふも、て東京に  
上り、洋學を研究せむやとの念を發し、其由を父母に  
告げ、に父母の曰く汝の志い感ぜべし、されど女子  
の獨旅行せんも他人のおもはくもいわざをば、暫  
く同行の人あるの時を待つべしと諭され、父の言  
の理に當れるも服せといへども、一旦思立ち、こと  
の果さで空しく過さへ、本意あらど、吾女子ふりとい  
へ、今や此の如く國治りて、戸ざいぬ御代あり、獨旅  
行といへ何かは怖しんと強ひて乞ひければ、父母も已  
むを得ず、遂に之を許せり、那嘉女大に喜び直ちに高

松を發し、大阪に出で、西京に入り、京阪間の學校の形  
狀をうかがひ、再び神戸に下り、瀛船に搭りて、横濱に  
達し、夫より東京の親族に依り、先づ若松町の鸚鳴塾  
に入舎して、英學數學を學び初めたりとぞ。

有竹子曰く、今や學校の設大に開け、都となく鄙とあ  
く皆競ふて學に入り、男となく女となく、各奮て文  
を脩むといへども、其尤も競ひ尤も奮ふもの、獨り  
地方を多しとて都下にも其人なきにあらざれど、  
男子に姑く措き、女子の性行、或は優柔に過ぎ、或は浮  
薄に流れ、朝は三絃の聲を弄し、暮は舞踏の技を學び、  
年稍長むに至れば、已に春風の來り誘ふありて、木瓜

瓊瑤の贈報をあるもの。往々皆是あり。何ぞ復た心を  
學問に傾け、女子の道を知るの暇あらんや。地方は之  
より反して、猶少く朴實の風を存し、時不父母の膝下  
を離れ、遠く笈を千里の外に負ふ。此女の如きもの、尠  
からむ。是より由て、亦都鄙文質自から差違ある所をも  
見るべきか。

第廿四 伊志女の孝志兼て従一の節を守りし事  
周防國吉敷郡岩淵村の農民石川伊八の妻伊志女。此  
家より嫁して、未だ幾ふらば、舅姑とも不甞疾を患へて、  
常小床に就きけむ。家産も随つて傾き、有る所の田  
地も、已に賣盡して、困窮日よ迫れり。夫伊八は、他は生

計の道を求めん爲め、商用を帶びて、遠國に行き、偶、其  
志を所を達せざりて、年を経れども、家より歸らむ。且久  
く消息あり。伊志女獨空閨を守りて、其操を改めむ。  
晝は人家に雇われ、夜は紡績して、僅に生活を支へ、以  
て舅姑を養ひ、其家真宗より、舅姑共、法議を喜び  
けむ。常に近傍の諸寺に佛事あるおとに、交るく、  
之を負ふて詣でしめ。夏の日は涼しき樹陰に、伴ひゆ  
き、冬の夜は爐火に、倚らしめ、二便の世話、其他の事  
まで、懇切に至らざるにあらず。然るを近隣の人、斯く  
獨身を以て、行衛の知れざる夫をたのみ、甲斐なき辛  
苦を盡きを見て、之を憐み、勸めて親の許へ歸らしめ



人とされど伊志女更も肯まば吾去らむ此衰病の舅  
 姑を如何せん殊また婦人は一たび嫁よめて復また他ほかに適あたく  
 の理ことなきを答へ只管従一の節を持もつ夫の久ひさく歸  
 らざるをのみ歎なげきけるに偶また長崎の人來りて伊志女  
 の孝行ことを感あず言ひけるハ先年周防の者ありとて已  
 と懇意にせしとあり年齢容貌聞きく所ところに似たり必  
 ず是こゝにあるべし吾飯國の後之を訪ひ以て其飯郷を促  
 さんといひしが其言を違へず長崎に飯りて伊八い八  
 遇ひ伊志女の事を語りけるに伊八妻の貞操けいそうに恥ぢ  
 速すみに岩淵村に飯り來りて久ひさく他國に流離りゅうりし兩親  
 をも省しるみざりし不幸を謝し夫より伊志女と共に力

を協たすして、農業を勤め、父母に孝養を致いたすに  
事官に聞えて、終身賦役免除し、猶年々米一俵を下賜  
し、其外にも時々賞金等をも給ひ、剰へ此頃には平民  
に姓氏といふものゝあらざる時あるに、特別の恩典  
を以て、姓氏を賜ひ、又本願寺の法主も之を傳聞して  
門徒の模範とあるべき者ありと、漆筆の法名に葉  
子等を添へて賜與せられけり、其後伊八も死して、伊  
志女獨七十餘歳の長壽を保ちしが、死後路傍に碑を  
建て、其行狀を記し、長く芳蹟を不朽に存せしめられ  
ぬ。

有竹子曰く、之を聞く伊志女の東隣、阿熊あるもの

あり、常に伊志女之行狀を見て、自から之にお化せられ、亦其父母の孝養を盡して、郷人の稱する所とあまると、徳孤ならん必を隣あり、吁偉あるか多。

第廿五 長野縣官吏某の妻より書翰を其妾に贈りし事

信濃國高井郡飯山町に住める士族某、長野縣官吏に補せられて、本縣に赴任せり、然るに其妻は老母の病牀に在りて、看護するの人なきが爲め、夫に従ふ能はざるが故に、其曾て識れるとあるの婦人を薦めて、妾とあり、之を夫に従はしめたり、其後妻より妾に贈る所の書の畧を云く。

同ト樹の下にお相宿りて、同ト流を結ぶも、皆前の世との契といへり、そなた吾身を如何ある宿世の縁ふか、そなたより親と慕へば、又おなたも子と思ひ、不便もまさりて、長く辛氣をこらへやうくや、同ト君お仕へ奉るおと、いとも嬉しき事に候、去まがら此末吾身と、そなたとの心一つおを、勿体なくも君の御名お疵のつく事お候へば、必を朝夕心を責めて、中睦しく能く勤め賜ふべし、不束ある吾身おがら、申を言葉と捨させ賜ふべし、そなたを薦め奉りし事を御用遊ばされて、斯様にお相成候事おれば、是よりへ某の家にも、妻妾おれども、波風起たを。

睦く珍らしき事か。是全く且那の教へよきゆゑ。風聞あるやうに致し候も、皆兩人の胸に在る。おとし候へむ。何卒心小隔あく。若心配の事あるときも、吾身小傳へよ。昔より本妻と妾との中、婦と姑との中の違ひめのおとし。勝げて數へがたし。已に飯山も某家の妻妾中むつかしく不和のより。兼り候。是其何某の事にあらば、皆そなたと吾身のよきて。ほんし候へむ。必む心を竭し。人々いつ視ても機嫌よく暮るといはふ。手本と相成るべし。是人小習ふに及む。兩人の胸に在るおとし。あれば此君の御許に仕へ奉らんとおもふ一念を忘るべからば。

當御時節、下人も多く暇を出し。吾身を責めて朝夕の炊きもいたし候事ゆゑ、人鉄を持たまへば出來ぬまでも、吾も鉄を持ち申さべし。吾持てばそなたも持べし。孰れも女子を嫁しとも、安き心いあきものより。銘々に苦勞のあきといふも、御座あく候へば、其積りにて御互ひし。逆も暮れあれば、心面白く世を送りたり。申までもあく候へども、如何やうある御仰おとし。さふらふとも、必む言を返さず。又は御返辭を致し。ながら早く起たぬは、誠に見苦しき事あれば、身を返辭と一緒に立て、御用の筋菜より候へ。叔女と申さものの、馴ふ小隨ひ心ゆるみ。仰事

も吾氣よ入らねむ御返辭も抄々敷いたさぬやう  
にかゝるものゝ候へば決して左様ある我儘を致さ  
間敷馴るに随ひ禮儀正しく仕へ奉るべし平生み  
だらに暮し候時も自然と人様御出の時も其風見  
へて吾は主人の氣に入りおれば如何やうもして  
も濟むといふぬばかりの素振見えそ其みにくき  
おとどもひ君の御耻は候へば飽までも禮儀正し  
く能く仕へ奉れば人皆君を譽めそあたをも温順  
の女子と譽め申さべし其時も吾も鼻高くしてい  
とい嬉しく悦むしく何と譬へんやうもあかるべ  
し宿も長男一人にて二男は吾身の里へ遣はし

候へむ心細く何卒心をまおほお持ちて好き男子  
を早く産み賜ふべし吾深くいつくしみ大切お育  
て申さべし夫のみ樂みは致し候必しく身重く  
相成候とも隠さべからば君の御種を吾何を以て  
心あしく思はんや元より其心積りよてそあたを  
おもめ申せしおれば我お任せ育てさせ候へむ  
世の人それお服してあき風聞は致さべからば  
實におあたと吾身もおれほどの中おれども互に  
嫉妬の念あるときは段々と年月かさなるに随ひ  
遂に隔出来て大なる耻とある事おれば女の第一  
慎むべき嫉妬の念あり自然其振りを見せ君お疎

かれ賜ふまじく云々。又人の過へ我身は引受け御  
詫申上ぐべし。吾功も人お譲りて君に申上候様は  
致し候も。其情深き意をありがたく思ひて。皆々  
服し身お禍もあるおとあかるべし。必ぞ吾誠を心  
にとめ。失念いたまじく候云々か。

有竹子曰く。此書尋常女子の消息をて。文章の觀る  
べき所あるにあらばといへども。其夫は仕ふるの道  
を教ふるや。切々懇々。懇懃丁寧。到らざるとおろおく。  
真情實意おのづから筆端は溢れ。特は其妾の警誡た  
るのみあらば。世の妬婦も之を觀れむ。必ぞ内お省み  
て自から耻る所あらん。然らば則ち。文は尋常おれど

も。其意は決して尋常あらば。大に一般の風化お關え  
るものあるあり。世の妻妾たらんものは。宜しく一通  
を寫して。座右の銘とあまべし。

明治十五年八月卅一日 版權免許  
全 十六年四月 刻成出版

兵庫縣平民

編纂兼出版人 上野理一

大阪府下東區高麗橋三丁目  
二拾一番地寄留

大阪備後町四丁目

吉岡平助

發兌 全 南久寶寺町四丁目

前川善兵衛

全 心齋橋南二丁目

松村九兵衛

書林 全 北久太郎町四丁目

柳原喜兵衛

全 安土町四丁目

北村孝次郎

東京  
全  
尾張名古屋  
全  
伊勢四日市  
全  
山田  
全  
津  
濃岐  
近江大津  
越前福井  
全  
西京  
全  
神戶元町  
播磨姫路  
全  
龍野  
備前岡山  
備後尾道

三木半兵衛	渡邊源米	高尾武治	山野長平	船井政太郎	佐々木惣四郎	杉本甚助	酒井安兵衛	岡崎左喜介	小川義平	三浦源助	篠田伊十郎	加東長平	伊藤善太郎	片野東四郎	川瀬代助	金港兵衛	内田彌兵衛	小笠原書房	稻田佐兵衛
-------	------	------	------	-------	--------	------	-------	-------	------	------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------

安藝廣島 全 長門船木 周防山口 出雲松江 全 筑前福岡 肥前長崎 全 肥後熊本 豐後大分 薩摩鹿島 伊豫松山 全 今治 全 川之江 土佐高知 伊豫松山 阿波德島 紀伊和歌山 全

平	野	阪	栗	澤	高	阿	土	吉	山	長	鶴	米	林	川	園	宮	中	以	松
田	井	尾	本	津	部	肥	田	川	崎	野	原	岡	喜	左	衛	臣	兵	文	村
井	太	萬	民	駒	住	三	與	幸	庄	次	常	多	斧	清	門	吉	禱	社	助
文	次	郎	吉	造	吉	松	郎	平	衛	郎	郎	藏	藏	助	助	助	助	助	助